

---

great distance love

白夜叉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

great distance love

### 【Nコード】

N9420N

### 【作者名】

白夜叉

### 【あらすじ】

この物語はノンフィクションとなっております。

登場人物の名前は一部変えてありますが、お話自体は何一つ変えておりません。

主人公、佐藤 澪は小学5年生の時、とある学習塾で同学年の信条 湊と出会う。

最初はただの悪友としての付き合いだったが、小学6年生の冬、2人の関係は悪友ではなく恋人同士へ。

住んでる地区が違ったために遠距離恋愛となってしまうが、メルなどの楽しい日々が続く。  
だが、そんな日々はいつまでも続かず・・・!?

史上最大のリアル遠距離恋愛。

読んだ貴方は大切な人近くにいるという幸せに気付かせてくれるよ  
うな恋愛小説!?( になるはず )

great distance love (前書き)

この物語はノンフィクションとなっております。

登場人物の名前は一部変えてありますが、お話自体は何一つ変えておりません。

では、どうぞお楽しみください。

g r e a t   d i s t a n c e   l o v e

『只今、アメリカ行きの便の準備が整いました。お乗りなられるお客様は、お早めに乗られるようにしてください。』

「あ・・・行かなきゃ。じゃあお母さん、お父さん、唯、行ってきます。」

「気をつけなさいね。何かあったらすぐに連絡しなさいよ」

「母さん・・・もう滯も中学生だぞ・・・？それくらい大丈夫だろう・・・なあ滯？」

「あはは・・・」

「みいーおっ！アメリカ行ってもいじめられいように頑張るんだぞー？」

「ばーかつ！いじめられても100倍にしてやり返すよ！つかおばあちゃんからいじめられるってどんだけよ？」

「てへっ、そうだった。」

「なあーにが、てへっ、だ。気持ち悪い。あ、あと唯。この携帯、預かってってくれる？」

「人に頼み事してて気持ち悪いとかいうなあ！！・・・まあいいけど？何でって・・・まさか、」

《溍さん？》

お母さん達にばれないよう口パクで『りく』という名前を出した、友達の唯に私はそうだよ、と笑った。

もう時間だと言っているのにしつこく大丈夫なのかと言ってくる母さん達と、私の少し傷ついた白色の携帯電話を預けた唯に行つてくると別れを告げ、笑顔で手を振りながら飛行機に向かった。足元からはカラカラとキャリーバックが気持ち良い音をたてる。

これから私はアメリカに住むおばあちゃんの介護の手伝いの為にアメリカへと旅立つ。

正直行きたくなかった。

友達との別れも嫌だったが、一番は溍との別れだった。

途中で危険が無いかと持ち物検索が行われたが、勿論危険な物を何一つ持っていない為難なく通れた。

大きい荷物を預け、飛行中の暇潰しのための物が入った小さな鞆と共に私は飛行機の中へと乗り込んだ。

自分の席を確認するためチケットを見ると、運良く一番後ろの左の列の窓側。

夜の便だったせいか人がほとんどいなかったから楽々出来た。

暫く座って、窓から綺麗に光る空港を眺めていると出発のアナウンスが流れた。  
アナウンスの中に安全の為にシートベルトを絞めろという案内が流れた。

それに従いシートベルトを締めると、飛行機が動きだした。

湊、私行ってくるね。

いつ帰れるか分からないけど絶対に戻ってくるから。

多分・・・いや、絶対に史上最大の遠距離恋愛になっちゃうけど、私はそれでも良いと思う。

好きだと言ってくれた、待ってると言ってくれた。

ただそれだけで私は十分だから。

待っていてくれなくても構わない。

ただ

おかえり、と言ってくればそれだけで良いんだ。

そんな気持ちを日本に残して、私はアメリカへと旅立った。



機内で、

日本を出て何時間経っただろうか。

私は飛行機が飛びたつてからイヤホンから流れる同じ曲を何度もリピートさせている。

途中で仮眠を取ったりしていたが、すぐに目を開けてしまっていた。携帯が使えないと不便なものだと思いつながら私は横の窓を見た。

そこには何度見ても変わらない風景、月に照らされて綺麗に透き通る雲と星空。

視線を窓からiPodの画面へと移した。

曲を変える為だったからだ。

チヨイスした曲、それは小学校の卒業式で私達が歌った曲だった。懐かしい。

「小学校か・・・」

小声で言わなかったせい、隣に座っていたサラリーマンの知らないおじさんに見られた。

すみませんと苦笑し、再度窓に映る風景を見た。

暇潰しにでもと、小学校の過去を振り返ることにした。

過去編 1

「きりーっ、」

ため息をつきながら立つ。

「きおっけー」

背筋を丸める。

「れーい」

大声で

『ありがとーございました!』

「あー、やっと終わった!」

私はゆっくり背伸びをし、帰るために机の横の塾用鞆へと手を伸ばした。

すると誰からか前の方から漣、と声をかけられた。

「今日の帰りって車?それとも電車?」

「あ、綾女かあー」

目の前にいるのは私の塾友達の上川 綾女。唯一の塾での女友達でもある。すごく頭が良くて、スポーツ万能、優秀な子。

「何よその残念そうな顔。悪かったわね、私で。」

「ただど毒舌。一つ一つの言葉がキツイ……。」

そんな綾女だけど、内心は優しいし、こんなバカな私でも一緒にいてくれるから好きだ。

いや、もちろん恋愛とかそっち系じゃなくて友達として。

「悪いとは言っていないじゃんかあー……。そういえば帰りだっけ？もち車だよー」

ふにゃつと私が笑うと綾女は軽くため息をつき途中まで一緒に帰ろう、と残して自分の席へと戻った。

その後、私は鞆の中に教科書とノート、プリントなどをぐしゃぐしゃに突っ込み、黒のコートをはおり、灰色のマフラーを首に巻いて綾女の元へと駆け寄った。

私達は雑談をしながら一階へと階段を降りていった。

ちょうど二階のホームにさしかかった時、

ドンッ

「うわっ!?!」

「痛っ!?!」

あー・・・やばい。

またいつものクセで男口調になってしまった、と思いながらぶつかった相手が誰だか見た。

「いたたた・・・」

あれ、何か見たことあるぞこの天パ。

「ったく、よそ見してんじゃねえよデブ。」

あれ、何かめちゃくちや聞いたことあるぞこの言い様。

まさかとは思いたくないが・・・まさかのまさか・・・

「・・・ミク・・・」

「死ぬ。何度も言わせんな！！俺は漆だ！！！！ちゃんと信条 漆つて名前あんだよ！！！！」

最悪。

何で今会うんだよ。

信条 漆、一番会いたくない時限つてに現れやがって。さっき喧嘩したの覚えてないのか？

あー……本っ当最悪。

「ちよつと、漆。大丈夫？」

「んえ？あー……何とか。ごめんごめん。ぼーっとしてた。」

「なら良いけど。ほら、帰るよ。もう7時だ。」

「え、まじで！？あの特集始まってんじゃん！早く帰「ちよつと待て！お前、俺転ばせといて謝りもしないで帰んのかよ！」

「……無駄な遠吠えを。大体、ぶつかって来たのはお前だろ？校内走るなよ。だからお前が謝れ。」

あーあ……これ以上、素の自分出したくなかったのに。畜生。

お前のせいで「可愛いワンコ特集」これであなたの心は癒される編」が見れねえじゃねえか。

「避けなかったお前が悪い！つか、走ったのは仕方ないだろー。急いでたんだから。」

「何、彼女とのデート？」

「ちげえよバカ！病院だよ病院！！」

病院？

え、何でよ・・・

《病院》、という言葉聞いた私は声が出なかった。

だって、

これ以上大切な人を失いたくない。

実は、私。

今日の前にいる男、

信条 達に片想い中。

だって、ありのままの自分を出せる。  
ちゃんと私の話に耳を傾けてくれる。  
コイツの前では素直に笑える。

コイツと一緒にいると心地好い。

そう感じた時にはいつの間にか恋愛感情があった。

- - - - -

あの頃の私は、

これからどんな悲しい時を過ごすかも分からずに笑って過ごしてた。

どこにでもいるような、1人の女の子だったね。

## 過去編 2

達と初めて会ったのは、小学五年生の時。  
塾の春期講習があつて席が隣だった。

「席どこだろ……。」

正直、受験なんてどうでもいい。

どうせ母親からの薦めだし。自分の意思で決めた訳じゃないから、  
落ちても受かつてもどつちでもいい。

席なんて友達近けりゃいいやって思いながら、席が貼り出してある  
ホワイトボードを気だるそうに見た。

あ、やった。

友達隣じゃん。

……ん？

「誰、隣のやつ。……しんじょう……ミク？」

「違つてしょ。これ、りくつて読むんじゃない？」



って笑われた。

良く見てみると確かに、りくって読む。

いやいや、そんなことより。

教えてくれたの、誰？

後ろを振り返ってみると友達ミウの美有だった。

だよーって、笑いながら教室へ向かった。

途中で美有が「あ、席見忘れた」って言いだした。

隣のことを教えたら、可笑しくなってまた笑いあった。

あの時の美有はとても良い子で、明るい子で、無口な方な私には憧れの的だった。

でもそんな美有とは春期講習が終わったら、突然にわなくなった。

元々は土曜クラスに通っていたけど、来ないから平日クラスに移ったと思ってた。

でも、現実って厳しいって、

その時初めて知った。

美有は小学五年生という若さで亡くなった。

春期講習の最後の日の帰り道、事故にあった。すぐく天気が良くて暖かい日だったんだって。

私は、それを聞いた時は声が出なかった。

泣くことさえ出来なかった。

春期講習のクラスへと向かった私と美有は、途中で先生に引き止められた。

「佐藤さんと藤伊さん、はいこれ。」

「げ、テスト？」

「藤伊さん。あなた女の子なんだから綺麗な言葉を使いなさい。」

「無理です。」

「何でそんなにキツパリと・・・」

と、突っ込んだ私はツボにハマって大爆笑した。

ちなみに、《藤伊<sup>トウイ</sup>》というのは美有の苗字。

《伊藤<sup>イトウ</sup>》じゃなくて《藤伊》なんだって、初めて会った時に笑ったら、思いつきり叩かれた。

「げ、私点数ヤベ。美有は？」

「・・・」

反応無しってことはヤバいんだなって確信した。

そんな私達は、席についた。

まだミク・・・じゃなくて、泣いて言う人は来てなかった。残念だったのか、それともこれで良かったのかといった複雑な心境にいた。

泣くという人が来るまで、美有と話しながら期待して待っていた。美有が他の子に呼ばれた。

ごめん、と一言残して美有を呼んだ子の元へと駆けていった。美有、友達多いんだよな・・・。

美有は誰にでも笑顔を見せる。

美有は誰にでも優しくする。

そんな美有の周りにはいつでも友達がたくさんいた。

それが私はともうらやましかった。

美有みたいに綺麗な笑顔を見せることができなかったから。

初対面の人なんて、笑顔どころじゃない。

顔が強ばって、にらんでる風に見えるらしい。

そう、周りの子に言われる。

こそこそ言ってるみたいだけど聞こえてるっつの。

別ににらんでるわけじゃない。

ただ人との付き合いが苦手なだけだ。

いつの間にかしかめっ面をしていた。

またやつちまった、と考えていると、美有じゃない隣から、ガタガタツと椅子を引く音が聞こえた。

まさかと思い、恐る恐る隣を見ると

予想通りだった。

そこには漆がいた。

相手も私のことを見ていたらしい。  
目が合ってしまった。

「……あ、お前。どっかで会ったことある。」

……え？

まさか私……いや、私しかないよな……。  
え、ちょ……こ、こついう時どうすればいいんだ！？

「……つぷ……!!はっ……あははははっ!!!!」

「あえっ!？」

「何その声っ!まじウケる!!はははがっ……!!ゲホッ、ゲホ  
ッ……」

「……つく……あははっ」

「……はははっ」

そう。

これが漆との出会い。

初めて、初対面の人に心から笑えた。

美有は呆気にとられてたな……

でも

まさか、漆が私の生き方を変えてくれるとは思ってもしなかった。

目を閉じて、

.....

「ん・・・」

柄にもなく懐かしい思い出に振り返っていたら、いつのまにか眠っていたみたいだ。

今どこあたりかな・・・

そんな気持ちがあった私はすぐ横の窓へと視線を移した。

そこはさっきとちっとも変わらない、一面の銀世界・・・

大きな月一つと、雲の床しかない世界だった。

私は、変わらない風景を映し出す窓から視線をずらし、再び目を閉じた。

達、

貴方の口から《病院》って出たあの時、

無言になった私を見て笑ってたね。

でも私はそんな軽い気持ちじゃなかったんだよ。

だって、

これ以上大切な人を失いなくなかったんだから。



目を閉じて、（後書き）

永遠、

元気になっていますか？

すごい久しぶりだね。

最近になって思い出した貴方との思い出をここに残そうと思う。

もし、見ていてくれたとしたなら

私はそれだけで充分。

もし、これを読んで元気を出してくれる人がいるなら

私は笑顔になれるんだ。

今は私、幸せだよ。

毎日が楽しいんだ。

永遠はどう？

楽しい日々を送ってる。。？

そうだったなら嬉しいな。

かなより。

ここまで読んでくださってありがとうございます!!

感謝、感謝です・・・(泣)

どうかこれからもよろしくおねがいします。

ここまで支えてきてくださった方。

達・・・永遠。

本当にありがとうございます。

.....

霜がでるほど寒い、ある冬の日。

毛布にくるまってぬくぬくしながら気持ち良く寝ていた私は、くるまっていた毛布をひっぺがされ、朝だとお母さんから叩き起こされた。

寒いと言文句を言うと、黙って早く起きろと言われた私は、イライラしながら時計を見た。

「AM 04:50」

四時間しか寝てないじゃないか。

昨日の夜、いくら明日が試験だからと言って深夜12時まで起きているんじゃないかと後悔しながらデジタル時計を一睨みし、ベッドを出た。

寒い、と呟きながら私はある1着の服へと手を伸ばした。

いわゆる受験服、ってやつに

今日は中学受験当日。

私が受ける所は私立の中高一貫校。意外とレベルは高い・・・？らしい。

高校受験がないから楽だっということに最近意識し始めて、11月から今日まで本気で勉強し始めた、

つてのは言い訳で。

本当は、湊に失恋したから。

湊は

《武永 嘉穂》

っていう塾で同じクラスの子が好きなんだって事を聞いた。

あの時は本当にショックでもおいっきり泣いた。目が腫れて、学校を休んだりもした。

それ以来湊とは話してない。すれ違う時もあったけど、目を合わせないようになっていた。

最初は寂しくて、いつでも泣き出せる状態だった。

でも、ある時いつまでもくよくよしてるんじゃないと自分に言い聞かせ、気をまぎらわせるために受験勉強に集中した。

達への気持ちをまぎらわせるために他の人を好きになる努力もした。でも、その努力は無駄ではなかった。

結果がでたのだ。

受験に対する気持ちも本気になったし、達以外の人を好きになった。

その人の名前は

### 《野田将臣》

優しくて、かつこよくて、スポーツできて・・・勉強が出来ないバ力。

だけど皆からは好かれるバ力だった。

笑顔を見た時、笑い方が達に似ていて、惹かれた。  
こんな私でも笑いかけてくれて、

「お前、明るくなつたなつ。」

って言うてくれた。

嬉しくて嬉しくて・・・しょうがなくて、惹かれた。

なんとなく、将臣といると達のことが忘れられそうで、

私は将臣に逃げていた。

いつからか、達と将臣を重ねて見ていたのかもしれない。  
達といるときと同じような笑顔を見せる私がいたから

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9420n/>

---

great distance love

2010年10月18日06時25分発行